

英語科

「書く力」をつける授業の創造

—写真をもとにした場所の紹介文作りの授業実践を通して—

村上直子

1. はじめに

学習指導要領における中学校外国語科の目標は、「外国語を通じて、言語の文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。」とある¹⁾。コミュニケーション能力の育成のためには、積極的な態度を育成するとともに、言語についての基礎的な理解が必要である。

いよいよ平成24年度から、新学習指導要領が全面実施される²⁾。中学校外国語科の改訂では、年間授業時数が各学年105時間から140時間へ増加された。しかし、指導すべき語数は3年間で900語程度から1200語程度へ増加されたものの、文法事項等の指導内容はそれほど増加していない。このことは、習得した言語材料を繰り返し活用しながら、言語活動を充実させ、定着を図る取り組みや指導が可能であり、指導者はその指導内容や方法の見直し、そして教材の開発などがこれから求められていくものと思われる。本研究は、「聞くこと、話すこと、読むこと、書くこと」という技能の中で、「書くこと」に焦点を当て、書く力をつけるための教材や、また授業実践についての一考察である。

2. 研究の構想

(1) つけたい力

広島大学附属三原中学校英語科では、昨年度よ

り「『書く活動』に焦点を当てた習得から活用へと結びつける力の育成」と題し、主に書くことに着目して英語の基礎的な学力をつけさせ、生徒たちのコミュニケーション能力の素地を養うことに取り組んできた。英語科で育成したい力を次の3つとした。

- ①創意工夫して何とか自分でやろうとする力
- ②自分の考えや気持ちを、初歩的な英語を用いながら他者に伝えようとする力
- ③他者とのコミュニケーションを通じて、自分の表現方法を吟味し、より適切に使用しようとする力

「書くこと」を通してこれら3つの力をつけさせようとしたとき、まず①に関しては、指導者側が目的が明確な単元設定をし、「誰に」「何のために」書くのかを生徒に提示すること、そしてその設定が生徒たちにとって適切で魅力的なものであることが重要になってくる。生徒たちに「書いてみたい」と思わせるような題材設定を見つけるためには、普段から彼らの行動や様子を観察することが大切である。②は、活動に必要な表現や知識を理解させるためのインプット活動が欠かせない。「聞くこと」や「読むこと」をどんどん取り入れて定着を図り、それらを「書くこと」へとつなげていく。新出事項や既習事項を活用したりしながら言語の使用場面を考えさせ、課題へ活用させていく。また、まとまった文章を書かせるときは、ブレインストーミングやマッピングなどという思考法を取り入れれば、アイデアや表現が広がりやつながりのあるものになる。

最後の③では、できあがった課題を班やクラス

の仲間と読み合い、他者の表現に触れさせる。エラーなどを指摘しあうというよりは、良かったところをまとめたり、自分の表現に取り入れていくという趣旨で作品を見せ合うと、他者のよりよい表現を取り入れようとしたり、自分の作品の文構造・文法事項における改善点にも気づき、自分で修正するようになる。



図1 「書く活動」で教えあう姿

(2) 「書くこと」に関して

書くことは、身近なことや自分のことなどを伝えるための、文字による表現活動である。また、話し言葉と違って、書き言葉は記録に残りやすいため、読み返しや書き直しが容易である。その特徴を生かして、生徒に作品を通じて他者と交流させたり、他の作品から得た考えや表現を取り入れることもできる³⁾。しかし、「書く」ということは、知識や技能を総動員して取り組むことが必要であり、コミュニケーション活動の中では高度な活動である。書いていることを理解してもらうためには、話すことよりも語句や文法において正確さが求められる。生徒にとっては英語力があらわになることへの恐れや難しさを感じ、話す活動よりも抵抗を示すことが多い。実際に、生徒たちは会話やスキットなどの話す活動では、ジェスチャーや表情、言い回しなどを用いて生き生きとコミュニケーションを成立させていた。一方で相手に自分の考えや気持ちを伝える手段として書く活動を組み込んでいった時、正しい語順や語法で文を書くことが不十分なために、コミュニケーションの不成立が多く見られた。もちろん個人

差はあると同時に、個人差が最も表れるのは書く活動の時であり、個々の基本的な知識や技能の習得なしでは活動が成り立たない。そこで、生徒の意欲・関心・態度を育てていきながら、書くことに慣れさせて、正しい表現形式を用いた豊かな内容の作品や、コミュニケーション活動がとれるようになるために必要な指導を、段階的に目的を設定し、書く活動の実践を行った。

3. 実践例

(1) 単元名

「Multi Plus わたしの町」

(2) 対象学年

広島大学附属三原中学校8年1組（男子20名、女子20名）

(3) 単元の目標

- There is/are の意味・構造を理解して、正しい英文を書く。
- 自分の好きな場所についての紹介文をまとまった量で書く。

(4) 単元計画

- 第1次 教科書にある「わたしの町」の紹介モデル文を読み、場所を紹介する表現を理解する。……………1時間
- 第2次 校内の好きな場所を撮影し、紹介する文を作る。……………1時間
- 第3次 自分の作品を撮影した画像も取り込み、wordでまとめる。できあがった作品をお互いに鑑賞する。……………1時間

(5) 活動の実際

①第1次について

本単元では、自分の住んでいる町を紹介した内容が扱われている。There is/are など既習事項を使って、何があるか、どこら辺にあるのか、などをいう表現を扱っている。教科書での例文を読み、内容を簡単に理解させたあと、それらの表現について整理させた。そのあと、過去の生徒が作った作品を読み、そこが校内のどの場所であるかを当てさせるリスニング活動とリーディング活動を取り入れた。同じように、校内のある場所を

紹介する英文を作り、お互いに鑑賞していくという目標設定を生徒に提示した。

授業後の生徒の感想は以下の通りである。

- 場所の表現の仕方をしっかり覚えて、次回につなげるようにしたい。
- 今日は場所の紹介の仕方についてやりました。次回は自分の好きな場所を紹介するんですね！楽しみです。
- 好きな場所…学校でそんなこと考えたことがなかったので、次回の授業がとても心配です。
- 場所の紹介の仕方でもいろいろあって、先輩の気持ちがわかる場所もあったので、自分もやってみたいです。

自分の好きな場所を説明するという課題は、自らが選択できるという点で意欲を高めたようだ。そして、過去の生徒作品を実際に紹介することによって、「自分たちもできそうだ」という見通しを見持たせた。

I would like to introduce a part of my school.
There is a school shop in my school.
It's in the west of the school building.
There are many goods in the place.
I go there I want to buy some bread for lunch.
Thank you.



図2 紹介した過去の生徒作品と画像

②第2次について

本時では、学校の中の好きな場所や空間を生徒に選ばせ、撮影させた。自分の好きな場所に実際に出向き、自らが撮影するという活動は、生徒たちにとり、とても興味深かったようだ。クラブ活

動の場所、休憩時間にいる場所、本が好きななら図書室など、生徒は自分の思う場所で撮影していた（撮影マナーや、他授業は決してじゃまをしないというルールは守らせたため、撮影場所には制限はなかった）。



図3 自分の紹介したい場所を撮影する生徒

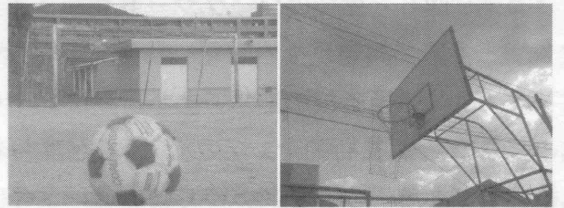


図4 生徒たちの撮影した画像

撮影が終わり、教室に帰ると、辞書を取り出し、英文の作業に取りかかった。班単位で行動し撮影したが、場所はそれぞれ違うため、英文は生徒ごとに異なってくる。書く量やスピードには差があるものの、自分たちの好きな場所ということで高まった意欲は、英文作りでも継続していた。前時に学習した表現を教科書やノートを見て参考にしていたが、その他で使いたい語句については和英辞書を使用させた。過去の生徒作品もいくつか提示したので、それを見て文構成や共通した表現を参考にしていた。



図5 英作文に取り組む様子

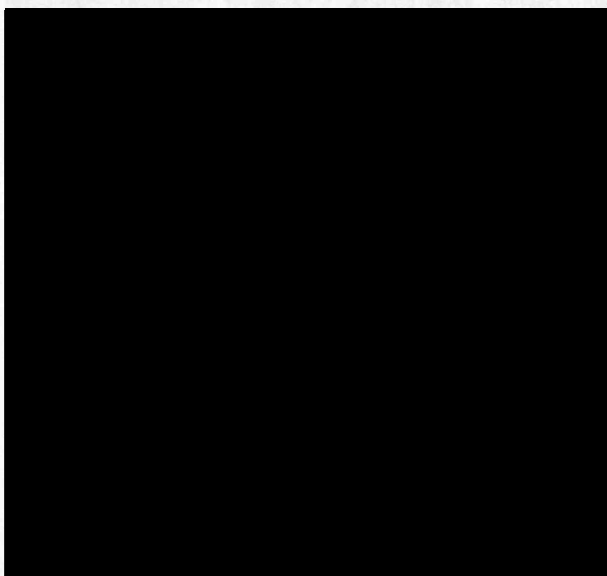


図6 生徒のワークシート

以下は、生徒の授業後の感想である。


- 好きな場所に行くというのはとても落ち着きます。またそのことについて書くというのはペンがはかどります。
- 自分は学校の全てが好きだから、決めるのが大変で、決めるのに時間がかかりすぎた。ここが私のいけないところです。
- 自分の好きな場所を見つけることができました。はやくみんなの好きな場所も知りたいです。
- 学校の好きな場所の紹介文を書きました。美術室は私の心のホームなので、ちゃんと紹介したいです。

③第3次について

本時では、パソコン教室でそれぞれが作った英文と撮影した画像を用いて、wordで作品作りをさせた。生徒たちは総合的な学習の時間などで、パソコン学習をしており、wordへの英文打ち込みやファイルの保存方法など基本的な作業は身につけていた。その活用力があるため、短時間でのまとめができた。さらに、クラス全員の作品を一人一人が自分のパソコンの画面で見て、鑑賞し、英文表現の良いものを見つけ、理由を書かせた。

以下は、生徒の作品と、それを見た生徒の感想である。

Class 8-1



I'm going to tell you about my favorite place in my school.

There is a mountain in my school.

We run at soccer team's training time.

It is near the mountain.


It's very bright there.

Thank you

- ・いつもの風景が違って見えた。
- ・意外な場所の説明だったけど、わかりやすかった。
- ・文や写真から、いつものサッカー部の活動が伝わってくる。わかりやすい。

図7 生徒の作品とそれを見た他者の感想①

Class 8-1



There're many books.

We can read books.

I'm a member of books committees.

So,I lent books here.


It's pleasant.

The room becomes composed fore me.

Thank you.

- ・〇〇さんは、図書室の一員で、貸し出しは楽しいということを文中に書いていて、写真も貸し出しをするパソコンからとって、文と写真があっている。
- ・〇〇さんは、図書委員で、本が好きなんだなということが伝わってくる。

図8 生徒の作品とそれを見た他者の感想②



I'm going to show you about my favorite place in my school.
There is a track and field team's room in an athletic field.
It's in the north of my school and near the mountain.
I like it because I practice the hurdles.
It's terrible but, I enjoy very much.
Running in a mountain is hard for me.
But, I will try various practice from now on.

Thank you.

- ・部活での風景が思い浮かべられるようです。英文もちゃんとわかりやすく書いているので、とてもいいと思います。
- ・英文が長い。たくさん書けていて、写真の眺めもいい。

図9 生徒の作品とそれを見た他者の感想③

以下は、生徒たちの紹介文作りと他の作品を鑑賞した後の感想である。

- 自分の言いたかったことが伝わったらうれしいです。他の人の写真も文もすごかったです。
- みんなの文を鑑賞できた。みんなわかりやす

く書いていてびっくりした。自分もがんばれたと思う。

4. 今後に向けて

好きな場所をクラスの仲間に紹介するという時は、学校外での場所を用いたほうが、there is/are の表現を使う上では自然な表現になると思われる。しかし実際に授業をするに当たっては画像撮影時に全員が学校所有のデジカメを使える学校内の場所や風景の紹介にとどまった。デジタル処理は、修正や加筆がしやすい。加えて、パソコン教室などで1人につき一台のパソコンが使える環境ならば、1人1人のペースで鑑賞もしやすい。今回は、鑑賞させた後に、もう一度自分の作品を手直しさせる機会を設けさせるべきであったというのが反省である。過去の作品から、よりよい表現を取り入れるということはしたが、クラスの仲間の作品を鑑賞したあと、その感想をいくつか紹介しただけにとどまった。「他者からのより良い表現を取り入れる」ためには、もう一度自分の作品を比較させ、書き直させるという活動も取り入れれば、紹介文の中に足りないところを補ったり、量が増えたりといったこともできるであろう。生徒に推敲させ、修正や改善をしていくという過程を繰り返し行うことによって、正しく英文を書く力や表現力をつけさせていきたい。

5. おわりに

従来は、中学校が外国語科の導入段階であった。しかし、小学校に外国語活動が導入されることになり、「聞くこと」および「話すこと」を中心に学習してきた子どもたちが中学校に入学してくる⁴⁾。つまり、音声中心に慣れ親しんできた素地の上に中学校での外国語科の学習指導を考えていく必要がある。小学校で身につけた音声を、どう文字という視覚化された言語と結びつけさせていくかがまず中学校初期での課題であろう。も

もちろん、これからも、「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」の技能も併せてバランスよく育成していくための教材や指導内容の開発をしていきたい。

「書くこと」は遠く離れた相手とのコミュニケーションや、時間を超えてのやりとりができるといった可搬性や永続性などの特徴がある⁵⁾。

また、書くことで自分の思考をまとめたり、熟考したりすることによってそれまでの自身の思考や意識をさらに高めることができる。相手との間接的なコミュニケーションは可能になるし、思考をまとめるといった自分自身ともコミュニケーションを取ることができる。

書く活動は、生徒の個人差が最も大きく、時間のかかるものである。段階的な指導や、表現などの理解や定着のためには「聞く」、「話す」、「読む」といった技能とリンクした活動も不可欠である。そして、「誰に」「何のために」書くのかという課題設定を生徒の興味関心を引きつけるものにしなければ、生徒に書く意欲は生まれにくい。しかし、書く力をつけさせることは、より多様なコミュニケーションをとれるという可能性を広げることにつながる。今後も指導内容や教材開発を工夫して、授業のあり方を模索していきながら、生徒たちのコミュニケーションの基礎をつけていきたい。

<参考文献>

- 1) 文部科学省：「中学校学習指導要領解説 外国語編」， pp.15-16， 2008， 開隆堂.
- 2) 平田和人編：「中学校新学習指導要領の展開 外国語科英語編」， 2008， 明治図書.
- 3) 樋口忠彦・緑川日出子・高橋一幸編：「すぐれた英語授業実践—よりよい授業づくりのために」， 2009， 大修館書店.
- 4) 村上直子・松尾砂織・柳瀬陽介・中尾佳行：「生徒の学習ストラテジーのきめ細かな記述と分析」， 広島大学学部・附属学校共同研究紀要， 第38号， pp.361-365， 2009.
- 5) 金谷憲・青野保・太田洋・馬場哲生・柳瀬

陽介編：「英語授業ハンドブック」， 2009， 大修館書店.